



「土塁状遺構」の様子（柳町遺跡）

## はじめに

昨今は、以前にも増して、さまざまな開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査が、県内のあちこちで行われています。

何げなく、毎日の生活をおくっている大地の下には、わたしたち祖先の生きた証しが、ぎっしりと詰まっています。それらは、多くのメッセージを私たちに伝えてくれます。

さて、上の写真は、何に見えますか。たくさんのが、土と重なり合うように、集中して出土しています。長さ約20メートル、幅約3～4メートル、高さ約1メートルの人工の構築物の一部です。これは、「敷板（葉）工法」と呼ばれるきわめて特殊な古代の土木技術によってつくられた「土塁状遺構」と呼ばれるものです。玉名平野の条里地割の下から出土した古代の役所跡の遺構だと想定されます。このような工法は、長崎県の「原の辻遺跡」の船着き跡と考えられるところや福岡県の「水城」の堤防などに見られます。

「文化財通信くまもと」第13号は、平成7年度に熊本県文化課が調査を行った埋蔵文化財発掘調査のうち、道路・ダム・建物などの建設や歴史公園計画などに伴って調査が行われた遺跡をご紹介します。

また、本号では、遺跡から出土する「木製品」について、発掘調査現場では、どのような処置がなされているのか、柳町遺跡の例をもとに木製品の出土の様子から1次保存処理までの過程を簡単にご紹介しています。

やなぎまち いせき  
柳町遺跡（第2次調査）

所在地 熊本県玉名市河崎字柳町  
調査面積 約5,500㎡  
調査期間 平成7年7月～平成8年3月

### 柳町遺跡のあるところ

「国道208号玉名バイパス」の建設予定路線地内にあります。水田が広がる玉名平野のほぼ中央部で、東側・西側にはそれぞれ菊池川と繁根木川が流れています。

### 調査の成果

現在の水田面（地表面）から約1.2～1.5メートルほど下に、今から1600年ほど前（古墳時代前期）の生活面であった微高地が見られます（写真1）。周囲には、低い土地が広がり、小さな川が流れた跡がいくつも見られます。微高地の上には、井戸をはじめ、多数の墓堀りの穴、枕など当時の人々の暮らしの跡が見つかりました。

そのほか、奈良時代末～平安時代初頭の土壘状遺構（1ページ写真）が見つかりました。それに伴う遺物として多数のウシ・ウマの骨、耳環、帯金具などがあります。

### 2号木製短甲（よろい）（写真2）

昨年度の1号木製短甲につづき、2点目の出土になります。古墳時代前期の井戸の中から出土したもので、前胴の左側部分になります。1号木製短甲とは作り方や形が明らかに違います。同じ遺跡、時期に2種類の木製短甲があったことを示すもので、全国で初めてのことです。

### 青銅鏡の破片（写真3）

古墳時代前期の小さな川のふちのところから出土しました。出土したのは、中国大陸から伝わったと考えられる青銅鏡の破片（破鏡）で、ひもなどを通すための鈕部分になります。鏡面と割れ目は磨かれ、ひもを通す穴がすりへっていることからペンダント的に使用されたとも考えられます。

### いろいろな木製品

古墳時代前期の川の底を中心に、「すき」「くわ」「鋳杵」「斧の柄」「木づち」などの農具をはじめ、多数の「木枕」、「柱」「はしご」などの建築部材、「盤」などの容器、糸つむぎに用いる「紡錘車」など、いろいろな木製品が出土しました。また、奈良時代末～平安時代初頭の土壘状遺構からは、「横ぐし」「木札」「はし」など貴重なものが出土しました。



写真1 調査区の様子（古墳時代前期）



写真2 2号木製短甲（よろい） 玉名市教育委員会提供



写真3 青銅鏡の破片が出土した様子 玉名市教育委員会提供

とうじまつもと いせき  
頭地松本B遺跡

所在地 球磨郡五木村甲字松本  
調査面積 約3,000㎡  
調査期間 平成7年10月～平成8年6月

頭地松本B遺跡は、川辺川ダム建設事業頭地代替地造成に先だって調査を行いました。遺跡は川辺川東岸の谷奥部の平坦な追地とその北側の尾根先端部にあたります。追地からは、中・近世の建物跡が見つかり、尾根部からは15～17世紀のものと思われる墓跡が見つかっています。本号では整理作業の進んでいる墓部分について紹介します。

五輪塔と石組墓（写真1）の一部は、「田山家墓地」として五木村の文化財に指定されており、古くから手厚く管理されていました。事前調査の段階では、この「田山家墓地」周辺の狭い範囲が墓地とされていたのですが、表面の腐葉土や表土を丁寧に取り除いてみると、墓地の範囲は東側に大きく広がり、代替地予定地の外側にも広がるようになりました。

墓の構造は石組墓（写真2）と呼ばれる拳大から人頭大の石を方形に組み合わせたもので、調査範囲内で16基見つかっています。この石組墓は埋葬の方法から土葬墓と火葬墓に分かれます。土葬墓は石組の下に座棺を据えるための穴を掘り込んでおり、土葬墓と思われる墓11基のうち7基から人骨の一部が見つかっています。また火葬墓は火葬骨の一部を石組内の何処かに埋納していたものと考えています。この火葬墓には標識として五輪塔が据えられていたと思われ、火葬墓が15～16世紀、土葬墓が17世紀代のものと考えられます。



写真1 五輪塔と石組墓



写真2 石組墓

さらにこの墓地の北側から、「一字一石経塚」と呼ばれる、径5cm前後の河原石に「法華経」と呼ばれるお経の文字を一字づつ墨書したものを積み上げた経塚が見つかっています。文字の筆跡は各々異なり、集団で経文を記したものと思われます。

経塚とは、弥勒が出現するまで経典を保存しようとの考えから造られたとされていますが、一字一石経塚の場合は、他の地域の類例からすると、亡くなった人の菩提を弔う追善供養を目的としたものが多いようです。この遺跡の場合も墓地の中に造られていることから、追善供養が目的だと思われます。



一字一石経石実測図

きくちしょうあと  
鞠智城跡

所在地 鹿本郡鹿鹿町大字米原字長者原  
調査面積 約7,000㎡  
調査期間 平成7年4月～12月

鞠智城跡は、アジアの情勢が緊迫した7世紀後半に、大和朝廷が築いた古代山城（自然の山の地形を利用したもの）の一つです。古代に築かれた山城は、県内では鞠智城だけで、大変重要な遺跡ですから、国の補助事業や県の自主事業によって、これまで、17次にわたって発掘調査を実施してきました。

これまでの発掘調査の結果、貴重な遺構が残っていることが確認され、「歴史公園化を目指し調査と整備を促進する」と県総合計画の中に位置付けられました。

写真1は鞠鹿町の米原<sup>とよはら</sup>台地で検出された建物跡の全景です。長方形や八角形に見えるのが建物跡で、八角形の建物跡は、日本の古代山城の中で、初めて発見されました。

これまでに64棟見つかっている建物跡は、大きく二つに分けることができます。一つは地面に掘った穴に柱を立てる建物で、もう一つは地面に大きな石を置いてその上に柱を立てる建物です。

写真2は平成7年度に発掘調査した50号建物跡で、石の上に柱を立てます。柱を立てるのは、左側に残っている平らな石で、その石が昔のままの場所で見つかりました。右側二列の丸く並べた小さな石は、大きくて平らな石の下に敷いたものです。

写真3は下に敷いた石を近から見たものです。丸い石や角張った石があります。

発掘調査を進めていると、この建物は火事になり焼け落ちたことがわかりました。

写真4はその火事で焼けた建物の木材の一部が炭になって見つかったところです。木材は建物の方向と同じ方向になっています。炭になったために腐らずに残っていました。

また、この建物が火事になったために、建物が米を貯蔵する倉であったことがわかりました。それは建物の中やまわりから、多量の炭になった米が見つかったからです。



写真1 調査区全景（南東上空より）



写真2 50号建物跡全景（南から）



写真3 50号建物跡北側一部（東から）



写真4 50号建物跡南側焼失材集中部（東から）

まんねんじいせき  
万年寺遺跡

所在地 八代市平山新町字平山  
調査面積 約5,000㎡  
調査期間 平成7年4月～平成8年3月

万年寺遺跡は、建設省が建設を進めている「南九州西回り自動車道」の路線地内にあたっていることから、発掘調査が行われました。

この遺跡はJR鹿兒島本線の肥後高田駅のすぐ裏手にあたります。

調査の結果、弥生時代の甕を納めた土塚、中世の豪族の館跡、万年寺と呼ばれている寺院跡、現代まで使用された墓地の跡などが見つかりました。

#### 弥生時代のお墓（写真1）

この遺跡から5基の土塚と甕が見つかりました。これらの甕は弥生時代後期に作られたものです。5基の土塚はちょうど土塁が巡っていたと推定される位置にあり、土塁のおかげで削られるのを免れたのでしょう。

#### 堀跡と土塁

遺跡の北東側と南西側に大きくて深い堀の跡と北東側の一部に土塁跡が見つかりました。土塁は堀を掘った土をすぐ内側に盛り上げて造られています。堀の底から土塁の頂上までは、深いところで、約6メートルもありました。この堀跡は現在のJRの線路までのびていると思われます。

また、この堀跡からはたくさんの土器や瓦器、陶磁器類、瓦のかげらがみつかりました。

陶磁器の多くは、肥前（今の佐賀県）で焼かれたもので、他に地元（八代市）で焼かれた高田焼（写真3）も含まれています。

#### 竪立柱建物跡

今回の調査では3棟の建物跡が確認できました。この建物跡は館跡のものと考えていますが、土器等の遺物が無かったので、断定は出来ません。

#### 五輪塔

寺院跡のものとして、五輪塔がたくさんみつかりましたが、残念ながら元の位置に残ったものはありませんでした。



写真1 弥生時代の土塚墓と甕



写真2 2号堀跡出土陶器（土瓶等）



写真3 2号堀跡出土陶磁器類 高田焼（八代焼）



写真4 2号堀跡出土陶磁器類 染付

くらんじょう い せき  
蔵城遺跡

調査場所 球磨郡錦町大字木上字蔵城  
調査面積 約6,000㎡  
調査期間 平成8年2月～平成8年3月

蔵城遺跡は迫地区急傾斜地崩壊事業に伴い、調査が行われています。遺跡は球磨盆地の球磨川と川辺川の合流地点から球磨川沿いに約10キロメートル程上った、高原台地南端のシラス丘陵上にあります。丘陵頂部からの眺めは良好で、球磨盆地を一望することができます。

この遺跡がある丘陵は、「蔵城」という字名が示すとおり、相良氏と新宮氏に米を上納する蔵があったと伝えられており、中世の山城跡と考えられていました。ただ残念なことに、昭和に入って2度の削平を受け、旧地形の半分以上が失われました。平成3年に現存する丘陵の東側高台の調査を錦町教育委員会が行った際、掘立柱建物跡3棟、土塁、堅堀が見つかり、土師器、土錘、染付皿、天目茶碗、青磁碗、白磁皿などの遺物が出土しています。今回の調査は、丘陵の残りの部分について行いました。

発掘調査の結果、西側高台に掘立柱建物跡1棟(写真1)、それに平行する東西方向、南北方向に延びる溝がそれぞれ1列見つかりました。また、西側高台から斜面を東に下りたところを起点に北側斜面及び南側斜面へ延びる堅堀がそれぞれ1条見つかりました。その他に、河原石が溝底に投げ込まれた直角に曲がる大きな溝が1条見つかりましたが、これも城に付随する施設と思われます。

遺物は、土師器、瓦質土器、須恵質の播鉢など中世の日常雑器のほか、青磁碗、白磁碗、宋銭のような中国からの舶載品も出土しています。また、西側高台をはじめ各所から土錘が出土しています。

この遺跡では、これら城跡に関連する遺構、遺物の他、縄文土器、古墳時代の土器など、中世以前の人の痕跡をうかがわせる遺物も出土しています。また、近世の陶磁器類、民家跡なども見つかっており、中世以降も継続して人が住んでいたようです。

この遺跡の東南に近接して「岩城」という字名を残す丘陵があります。これも中世の城跡で、平河義高の築城と伝えられています。この「岩城」との関連が今後の課題と言えるでしょう。



写真1 蔵城遺跡(○印が調査区)



写真2 掘立柱建物跡



写真3 「遺物」出土の様子

こがきたいせき  
古関北遺跡

所在地 上益城郡益城町大字古関字崎久保  
調査面積 約6,000㎡  
調査期間 平成7年4月～平成8年1月

熊本県の商工政策課が計画している、産業展示場建設事業に伴い、古関北遺跡の発掘調査が実施されました。

今年度は主に、第二空港線の拡幅部分及び第二空港線の北側に取り付けられる、進入道路部分の調査でした。

調査の結果、縄文時代後・晩期（縄文時代の終わり頃で、今から約2,500年位前）の遺跡ということがわかりました。

当時の人々が地面を掘り下げて造った、竪穴住居跡（写真2）が2基、子どもの墓と考えられる埋篋（写真1）が1基、ドーナツ型の円形周溝遺構が2基、土地の境界であったと思われる溝跡が5本、ゴミ捨て穴と思われる土坑が数基見つかりました。

その他にも、当時の人々が使用した土器片や石器片が数千点出土しました。

なお、進入道路部分が古関北遺跡の北限かと思われます。



写真1 埋篋の出土の様子



写真2 縄文時代の住居跡

かのおしゅうあと  
亀尾城跡

所在地 菊池郡七城町大字板井  
調査面積 約800㎡  
調査期間 平成8年1月～平成8年3月

県道、辛川鹿本線の改良工事に伴って、中世城である亀尾城の城山の西側すそ部分を発掘調査しました。

南北朝時代に、今川了俊が菊池氏を攻める為に、陣を張ったといわれるこの城は、いつの築城かははっきりしていません。

今回の調査では、城のほんの一部分を調査しただけですが、曲輪と呼ばれる平坦面が2ヶ所で見つかりました。建物の柱を立てた跡と思われる穴も多数見つかりましたが、建物として特定できるものはありませんでした。また、それより古い時代の8～10世紀前半の土師器と呼ばれる土器やかまど付の住居跡（写真2）も1基見つかりました。



写真1 調査区の様子



写真2 かまど付の住居跡（平安時代）

## ラスギ遺跡

所在地 鹿本郡植木町大字滴水字ラスギ  
調査面積 1,600㎡  
調査期間 平成8年2月～平成8年7月

平成6年度の調査1区～4区に引き続き、平成8年2月から平成8年7月にかけて調査5区において発掘調査を行いました。調査面積約1,600平方メートル中に、旧石器時代～縄文時代早期（約20000～7000年前）・縄文時代晩期（約2500年前）・弥生時代後期（約1800年前）・古代～中世（7世紀～12世紀）の4期にわたる生活面が見つかりました。

そのなかでも弥生時代後期は、遺構・遺物が特に多く見られました。住居跡は6基見つかりました。いずれの住居もベッド状遺構を持ち、方形の形をしています（写真1）。柱は2本のものとは4本のものがあります。このうち1基から、埋土からですが銅鏃（やじり）が出土しました（写真2）。また別の2基では、柱穴・炉・貯蔵穴からガラス小玉約30点が出土しています。住居が廃絶してすぐに、何らかの理由でばらまかれたようです。

このほか、主な遺構として、縄文時代晩期の住居跡2基・埋設土器3基、6世紀頃の竈を持つ住居跡1基、中世頃の2間×3間の掘立柱建物跡1棟・土坑7基が見つかりました。また旧石器時代遺物としてナイフ形石器・槍先形尖頭器が見つかりました。

このように、ラスギ遺跡周辺では旧石器時代から人々が暮らし始めたことがわかりました。特に弥生時代の多様な生活跡がみられました。今後このあたり一帯が調査されれば、さらに弥生時代の大きな集落が見つかる可能性があるでしょう。



写真1 弥生時代の住居跡



写真2 「銅鏃」出土の様子

### 本号の中で使われている用語の一部を簡単に説明します

- \* 「○○遺跡」の「遺跡」とは、「遺構」や「遺物」があるところです。
- \* それでは「遺構」「遺物」とは何なのでしょう。「遺構」とは、昔の人々が残したもののうち、古墳や住居跡のように土地に固定され動かすことができないものです。「遺物」とは、昔の人々が残したもののうち、土器や石器などのように持ち運びができるものです。
- \* 「堅穴住居跡」が7、8、9ページで紹介されています。この「堅穴住居」とは、地面を掘り、床を作り、その上に屋根をかけた半地下式の家のことです。縄文時代から平安時代に見られ、それぞれの時期で住居の形や住居内の様子（炉やかまどなど）に変化が見られます。

## 石の本遺跡

所在地 熊本市平山町字石の本  
調査面積 96,900 m<sup>2</sup>  
調査期間 平成6年4月～平成9年3月

石の本遺跡は、平成11年に開催予定の「くまもと未来国体」の予定地にあたるため、平成6年度から発掘調査が行われています。この遺跡は、熊本市の北東部にあたり、その北側には白川が流れています。これまでの調査によって九州最古段階の旧石器時代の石器、縄文時代・古墳時代の集落の一部が見つかっている大遺跡です。

本年度は、国体会場西側にあたる「花の広場」を中心に発掘調査を進めています。

今回の発掘調査の結果、特に注目できるのが旧石器時代の遺物や炭の出土です（写真1・2）。旧石器時代の遺物は、今のところ約600点の石器が発掘されました。これほど集中して旧石器が発掘された例は熊本市周辺ではめずらしいことです。

旧石器は、地表から約0.5～1.0メートル下のニガ土層の中にある黒色土層から発掘されています。この黒色土層は「始良丹沢火山灰（約24000年前の層）」の上に堆積していることから、24000年より新しい時代の地層です。したがって、旧石器も24000年より新しい時代の道具となります。

石器は簡単な技法により作られ、多くの石器が、石を割って石片を作り、その石片からナイフ形石器、台形石器等が作られています。石器を作るときにできるクズも多量に見つかっていることから、この遺跡で石器が作られていたことを示しています。

石器と一緒に見つかった炭は、当時の生活を知るのに貴重なものです。炭の広がり、石器の広がり、重ならず、旧石器を作っていた人が暖をとるために火を燃やしていたことが想像できます。

以上のように、石の本遺跡に見られる石器の広がりや炭の広がりから、旧石器時代の生活のいっぴんを見ることができそうです。

古墳時代の遺構は、住居跡（写真3）が5基見つかっています。面白いことに、その5基とも火災をうけています。



写真1 調査区の様子（旧石器時代）



写真2 「石器」出土の様子



写真3 古墳時代の住居跡

# なぜ、千年以上も昔の木が残っているの？

「どうして千年以上も昔の木が残っているの？」という質問をよく耳にします。確かに土器や石器と違い、木製品は、有機質のため腐食しやすく、残りにくいものです。

柳町遺跡（玉名市）の周囲には、菊池川と繁根木川の両河川が流れ、水田地帯が広がっています。そのため、地表面から1.2～1.5メートル下の古墳時代（前期）の生活面は、地下水位が高く、水位面が安定しています。そこは常に水に浸された状態で、空気がさえぎられ、木材を腐らせる微生物が活動できず、木製品が残っているのです。しかし、出土した木製品は、決して良好な状態ではありません。土の中に埋もれている長い間に、木材の組織が

## 遺跡内での記録

写真撮影や実測作業を行い出土の様子や出土地点の記録を行います。



「横ぐし」の出土の様子



「くわ」鳥形木製品の出土の様子

## 木製品取り上げ作業

細心の注意をはらい木製品をとりあげます。



## 木製品台帳の作成作業

木製品台帳を作成し、木製品の管理をやりやすくします。

## 保存処理へ

一時保管されている木製品を計画的に、現代の保存科学の技術で再生を行います。再生された木製品は、水づけしない状態で、変形の心配なく、保管・展示ができます。

壊され、水分を通常の数倍から十数倍も含み、もろく崩れやすい状態になっています。そして出土した瞬間から、千数百年ぶりに空気に触れた木製品は、変色・変形の危機にさらされることになります。そのため、水分を絶やさないように水づけの状態を保つ必要があります。

このような木製品は、保存処理（出土木製品の再生）が行われるまでの間、発掘調査現場ではどのような処置がなされているのでしょうか。

柳町遺跡の例をもとに、木製品の出土から1次保存処理までの過程を簡単に紹介します。

### 水洗い作業

木製品についている土をハケなどを使っていねいに取り除きます



### 仕分作業

出土地点、木製品の大きさ、木製品の種類ごとに仕分作業を行います。

### 実測・写真撮影作業

木製品のさまざまな特徴を正確に記録します。



実測作業の様子

### 密閉パック作業

小型の木製品は、1次保存のためバキュームシーラーを使いパック内の空気を抜きとる密閉パックを行います。これにより、木製品の保管・管理がたやすくなります。

また、密閉パック作業が困難な大型の木製品は、水そうや大型コンテナ内で水づけの状態で一時的保管を行います。



密閉パック作業の様子



密閉パックされた木製品

平成7年度に調査した遺跡 (農政事業関連調査を除く)

No	遺跡名	所在地	事業名	調査期間	成果(時期)
1	柳町遺跡	玉名市大字河崎字柳町	国道	H7.7~H8.3	井戸跡・木製短甲・木製品(古墳-前) 土器状遺構(奈良・平安)
2	須地松本B遺跡	球磨郡五木村甲字松本	川辺川ダム	H7.10~H8.6	建物跡・墓地(中世・近世)
3	鞠智城跡	鹿本郡菊鹿町大字米原字長者原	遺跡整備	H7.4~H7.12	礎石建物跡(奈良・平安)
4	万年寺遺跡	八代市平山新町字平山	国道	H7.4~H8.3	土壘墓(弥生) 館跡・寺院跡(中世・近世)
5	蔵城跡	球磨郡錦町大字木上字蔵城	急傾斜地対策	H8.2~H8.3	掘立柱建物跡・溝(中世)
6	古閑北遺跡	上益城郡益城町大字古閑字崎久保	産業展示場	H7.4~H8.1	竪穴住居跡・埋裏 円形周溝遺構(縄-後~晩)
7	亀尾城跡	菊池郡七城町大字板井	県道	H8.1~H8.3	竪穴住居跡(平安)、曲輪(中世)
8	ワスギ遺跡	鹿本郡植木町大字満水字ワスギ	県道	H8.2~H8.7	石器(旧) 竪穴住居跡(縄-晩・弥-後・古墳)
9	石の本遺跡	熊本市平山町字石の本	国体主会場	H6.4~H9.3	石器(旧)、竪穴住居跡(古墳)
10	谷口遺跡	熊本市清水町万石	県営住宅	H7.9~H7.10	柱穴(平安)
11	杉の木どん遺跡	天草郡天草町大字下田北	県道	H8.1~H8.1	墓地(近世)



凡例

成果の時期は次の通り。  
 旧石器時代……旧  
 縄文時代 早期～晩期…縄-早、前、中、後、晩  
 弥生時代 前期～後期…弥-前、中、後  
 古墳時代 前期～後期…古墳-前、中、後  
 奈良時代……奈良  
 平安時代……平安  
 中世……中世  
 近世……近世

編集後記

やっと第13号が出来上がりました。本号が、多くの方々に、先人たちが残してくれたメッセージを紹介する一助となり、埋蔵文化財への理解を深めてもらうきっかけになれば幸いです。

みなさんのご意見、ご質問をお待ちしています。

文化財通信くまもと 第13号

平成9年3月31日 発行

発行 熊本県教育庁文化課

熊本市水前寺6丁目18番1号

☎096-383-1111(内線6716)

印刷 藤ハタノ

08 教委 教文

③ 010